

新山定住促進協議会（長野県伊那市）

保育園と小学校を中心とした、 定住できる地域づくり

新山定住促進協議会

会長
田畑 正敏



1. 伊那市・新山地区の概要

伊那市は、長野県の南部に位置し、南アルプスと中央アルプスの二つのアルプスに守られ、市の中央部を天竜川と三峰川が流れる豊かな自然と歴史、文化が育まれた自然共生都市です。

電気、精密、機械などの高度な加工技術産業や食品などの健康長寿関連産業が発展し、モノづくり産業の拠点として、いくつもの工業団地が形成されています。また、肥沃な土地と豊かで良質な三峰川水系の水を活かした米作りのほか、野菜、果樹、花卉などの農業が盛んです。

新山地区は、伊那市のほぼ中央に位置し、標高約 600m～1000m の丘陵地に清らかな新山川が流れ、水と緑に囲まれた自然の中に息づいている、人口約 700 名、240 世帯の地域です。新山保育園と新山小学校、そしてレストランとパン屋が一つずつ、地域の宝物として根付いています。



夏の新山の風景

2. 活動開始の背景・経緯

昭和 22 年、新山地区住民は全戸 PTA 加入という叡智を搾り出し、地区民全員で子育てをするのがあたりまえのものとして、保育園、小学校を大切にされた地域づくりをしています。

新山定住促進協議会の前身である「新山の保育園・小学校を考える会」は、新山保育園の園児数の減少、それに伴う新山小学校児童数減少を危惧した当時の新山区長会が中心となり、「新山保育園・新山小学校を末永く残してほしい」という住民の意を受けて、平成 18 年 9 月に活動を始め

ました。しかし、園児数の減少から平成 21 年度に新山保育園は休園となってしまいました。折しも、平成 21 年度に新山小学校が小規模特認校として伊那市内どこからでも通える体制となったことを受け、児童数確保に向けて地域全体で活動する中で園児を集めた結果、平成 26 年度より新山保育園を再開することができました。

この活動を通じて、新山地区への定住についての関心が高まり、平成 26 年 10 月より「新山定住促進協議会」に活動を発展させました。現在は、新山地区の活性化を図るため、地域、行政、民間事業者等と協働して、住民がより安心して暮らせるような環境形成を目指して活動しています。



新山小学校

3. 活動の内容

新山定住促進協議会は、次の 4 つの部会があり、分野ごとの活動を会全体で連携して取り組んでいます。

○総務部会

・新山保育園、新山小学校児童の活動や、子育て世代の皆さんを応援し、住民がより安心して暮らせるような環境形成を目指しています。

・地元の上伊那農業高校による、鹿肉を活用した新山の特産品作りをサポートし、地域内のパン屋を通年販売が実現しています。

・他の団体等と必要に応じて連携し、地域へ活動内容を広報しています。

○子育て応援部会

・各種イベントの企画、応援を通して、お母さん、お父さんの交流を図っています。

・新山保育園、新山小学校の活動の応援をしています。

・地区をあげての食育について考えています。

・新山保育園園舎の環境改善のお手伝いをしています。

○住まい整備部会

・定住促進のためのハード面（住まい、土地）の整備をしています。

・土地の情報収集や、移住希望者へ空き家、貸家、売家等の紹介をしています。

○田舎暮らしサポート部会

・移住希望者、移住者等に対して、特にソフト面でのサポート（応援）をしています。

・UI ターンしやすい環境づくりをしています。

・「田舎暮らしモデルハウス」を活用し、移住者も参加しやすいイベントの実施をしています。

・移住者の相談にのるなど、生活面でのサポートをしています。

・農業活動の推進をしています。



新山定住促進協議会の会議

4. 活動の広がり

「新山の保育園・小学校を考える会」の時代より、小規模特認校として新山小学校に学区外から通学する児童を含め、児童、保護者をサポートする「新山っ子応援団」を結成し、小学校や保育園の環境整備の支援や、時には地域講師として授業に参加するなどの活動を行ってきました。

最近では、行政と連携し、高齢者などが地区集会所からインターネットを通じて市街地の商店の買い物を注文し、路線バスで届けてもらう「新山いきいきマーケット」の実施や、

移住者に向けたPRのために、田舎暮らしモデルハウスを活用した田舎暮らし体験の推進をするなど、住む人がより暮らしやすくするとともに、移住者を増やす工夫をしています。

地区の女性や、新山小学校、新山保育園の保護者などで「新(にい)ママクラブ」が新たに結成され、子育て世代の交流を行っています。これらは、移住者の発案や運営によるものが多く、住民交流の一環にもなっています。

平成29年6月には、銀座NAGANOで新山地区住民が自ら発案し新山地区をPRするイベント「よってかっし里山新山」を初開催しました。



新(にい)ママクラブ

また、地元高校生や都市部の大学生にも積極的に地区と関わってもらい、交流の場の創出と、新たな視点からの地域づくりを行っています。

5. 活動の継続性

「新山の保育園・小学校を考える会」での活動の中で、子育て環境をよくするために地区外から新山地区へ転居したいという声が聞かれたことや、新山地区への定住、Uターンに関する相談を受けていた経緯があり、「新山定住促進協議会」結成以降は、移住者の受け入れのために、地区住民をはじめ、伊那市や長野県などの行政や、民間事業者等と連携し、ホームページやパンフレット等による県内、都市部などに向けた新山地区のPR活動や、体験宿泊が可能な「田舎暮らしモデルハウス」の設置などにより、移住に向けた相談、サポート体制を整えました。

また、地域住民とのワークショップを開催することで、地域全体で活動に取り組んでいく機運の向上を図り、継続的な地域づくりの担い手の育成をしています。

6. 地域資源の活用

新山地区で整備をしている湿地(トンボの楽園)でのハッチョウトンボの保護や環境整備を、新山小学

校の児童が行っています。毎年行われるハッチョウトンボの観察会には、地区内外から多くの家族連れ等が訪れ、賑わいを見せています。この他にも、森林を使ったツリーライミング教室や木育、竹を使った流しそうめん、小学校講師による「星を見る会」など、新山地区にあるモノ、ヒトを活用して、子どもたちへの環境教育活動の充実を図っています。



ハッチョウトンボ

また、地区で収穫された地元野菜や米などを販売する新山地区ならではの「新山まつり」には、地区外からも毎年多くの来場者があり、地元住民との交流の場ともなっています。

さらに、これまで有効的に活用されてこなかった有害鳥獣としてのニホンジカを活用するため、上伊那農業高校畜産班による鹿肉の商品開発により加工から販売までが行われ、鹿肉の有効活用とあわせて、新山ブランドを発信しています。



鹿肉商品「でいあでいあ」

7. 創意工夫

ホームページ「里山新山」を運営し、暮らしの様子や移住者のインタビュー等を掲載し、新山地区の魅力の発信を行っているほか、移住希望者が新山地区での暮らしをよりイメージしやすくなるよう、パンフレット「おいでなんしょ新山」を作成し、あわせてPRしています。



パンフレット「おいでなんしょ新山」

8. 成果

新山保育園の再開園や全戸PTAといった取組みにより、地域の子どもは地域全体で育てるといった一体感がさらに高められています。また、長年にわたる活動の積み重ねにより、地区住民のUターンや移住に対する関心も高まり、毎年移住してくる方(新山定住促進協議会が関わった移住者…平成26年度12名、27年度9名、28年度8名)がみられ、移住者はもとより、地区のイベントなどでも地区外との交流が生まれています。

また、行政との連携により、種々の指定、認定を受けています。

平成27年4月 伊那市田舎暮らしモデル地域に指定

平成28年12月 長野県移住モデル地区に認定

平成27～28年度 長野県集落“再熟”実施モデル地区支援事業認定



新山保育園

9. 課題と展望

現在、移住希望者が増えたことから、新山地区内の住まい(空き家等)の確保が課題です。特に、田舎で子育てをしたいという若い世代が何年か暮らしながら生活基盤を築けるような定住希望者向けの住宅の整備や、働く場所の確保等で行政等と連携する必要もあります。

知らない土地に来る移住者を、地元の人がどのように迎えるかは、移住定住において大きなポイントとなります。以前は、地元住民と移住者で折り合いのつかない場面も見受けられましたが、協議会発足後は、地域全体で積極的に移住者と交流を持つようになり、お互いに理解が進んでいます。

これからも、新山地区の地域づくりは、新山定住促進協議会が核になり、新山保育園、新山小学校を中心にして、定住しやすい環境の整備を継続していきます。